いい仕事をするための

SPECIAL BOOK

- 市民と一緒にするノウハウ集 -

明石版 Akashi 協働術 kyo-do-jutsu

はじめに

仕事の結果が大きく変わる
明石版 協働術 ・・・・・02

仕事を楽しむ ・・・・・04

PART1
一緒にする！「明石の協働事例」

子ども ・・・・・・・・・08
安全安心 ・・・・・・・・・10
健康福祉 ・・・・・・・・・13
自然環境 ・・・・・・・・・14
公共管理 ・・・・・・・・・17
道路整備 ・・・・・・・・・19
地域活性化 ・・・・・・・・20

PART2
基礎解説「協働ってなに？」

なぜ協働？ ・・・・・・・・24
明石市の取り組み ・・・・25
「協働」できる事業・・・・26
「協働」の形態・・・・・・27
「協働」のパートナー・・・28
「協働」のステップ・・・・29

PART3
今すぐ使える！「協働のヒント」

３つの重要なＰＯＩＮＴ・30
ウマくいくためには
どうしたらいいの？・・32
コミュニケーション編・・34
会議の場づくり編・・・・38
会議で可視化する編・・・42

PART4
現場の疑問 Q&A

Ｑ＆Ａ・・・・・・・・・・46

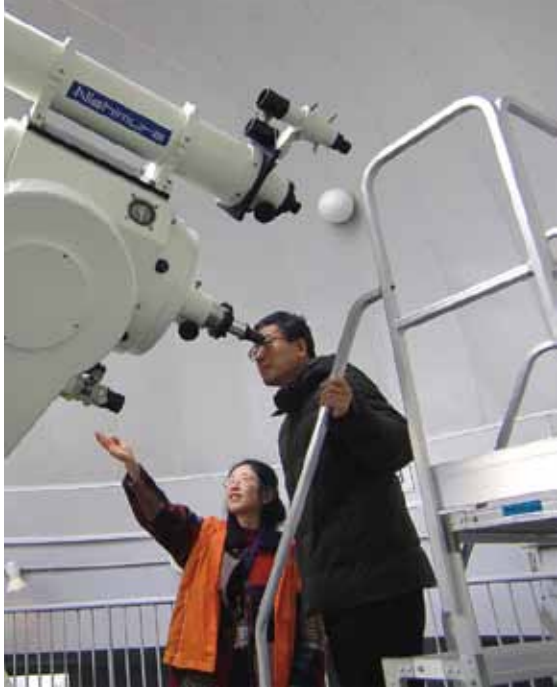
発行にあたって

「協働が大事なことはわかるけど、じゃあ具体的にどうすればよいのか」、そのような声をよく聞きます。「協働」とひと言でいっても実際には非常にわかりにくいものです。本書は明石市の協働の事例を紹介するとともに協働の具体的なノウハウを提供することで、明石市の協働のまちづくりを推進することを目的に「明石市市民協働推進室」と「明石コミュニティ創造協会」が連携して作成しました。

明石版

協働術

仕事の結果が大きく変わる



いい仕事をする。

プロセスを変える

市民に感謝されたり、喜ばれたり…。いい仕事をするために市職員は日々奮闘しています。そうは言っても、市役所の仕事は成果が見えにくいものが少なくありません。見えにくい仕事だからこそプロセスが重視されます。それならば、このプロセスを少し工夫してより「いい仕事」にできればいいと思いませんか？

その工夫が「協働」ではないかと思います。本書では、「協働」をいい仕事、いい結果を生み出す手法と考えてみました。

写真（上から）右上：公園愛護会／中上：安全・安心パトロール／中下：半夏生の日ＰＲ／中左：あかし文化遺産マップの作成及び活用／下右：レジ袋削減に向けた取り組み／下中：あかし楽講座／下左：ごみ減量推進員制度／上左上：天文科学館ボランティア（天ボラ）活動／上左（下右）：エコウイングあかし／上左（下左）／スクールガード

役所で仕事を楽しむ

「協働」という言葉を聞くと、どのようなことをイメージされますか。

必ずしもそれはプラスのイメージばかりとは言えず、「何か新しい協働事業をしなければならないのではないか」「負担が増えるのではないか」というマイナスイメージも少なくないのが現状ではないでしょうか。

近年、多くの自治体で「協働のまちづくり」が謳われるようになりました。明石市においても、平成18年度から「協働のまちづくり」が進められています。協働が必要とされる背景には、市民ニーズが多様化・複雑化し、行政や市民だけがそれぞれ単独で地域課題に対応することが難しくなってきたということがあ

一緒に考えるスタイルが これからの 定番

ります。行政と市民がそれぞれの強みを活かし合い、互いに協力し合いながら対応していく必要があるのです。

しかし、「行政と市民が協力し合いながら」ということは今に始まったわけではありません。これまで行政が取り組んでいる様々な事業の中にも、市民と協力しながら進めることが基本となっているものがたくさんあります。

これは明石市においても同様で、本書の「Part1」で紹介している事例のように、市民と一緒に企画し、実施されている事業がたくさんあります。これを見てみると、「市民と一緒に打ち合わせする場を持った」あるいは「市民に丁寧に説明した」といったように、事業実施のプロセスに、少し市民を巻き込む工夫をしたことがきっかけになっていることがわかります。

つまり、「協働」という言葉だけを聞くと難しそうなイメージになりますが、通常実施する

事業のプロセスをほんの少し工夫するだけなのです。その少しの工夫が、市民と一緒に実施するきっかけを生み、主体的に市民が関わる事業へと発展していくのです。それが「協働」ということなのではないでしょうか。

そして、市民と一緒に考えるプロセスは、楽しいものなのです。明石市の様々な協働事例を集める中で印象的だったのは、協働に関わる職員がみんなとても楽しそうに仕事をしていることです。市民が主体的に関わって、一緒に作っていく喜びを日々感じているからでしょう。市民とともに考えるという過程をどれだけ楽しめるか、これが協働の鍵といってもいいのかもしれません。

今の仕事の中で、市民とともに取り組めるところはないだろうか、もうひと工夫できるところはないだろうかと、ほんの少し振り返ってみるところから協働は始まります。